

追悼

# キャロル・スローンの思い出

in memory of Carol Sloane

文：高田敬三

(ミュージック・ベンクラブ・ジャパン会員、  
ホット・クラブ・ジャパン会員、ボーカルを楽しむ会主催)

キャロル・スローンが今年1月23日に2年前の脳溢血の後遺症でマサチューセッツ州ストーンハムの養護施設で亡くなった。85歳だった。彼女の追悼記事がニューヨーク・タイムズやダウン・ビート誌等各紙に出ているが、彼女の復活の契機となった日本での活躍にはほとんど触れられていない。彼女とオールアート・プロモーションの石塚孝夫氏(1932-2022年)の出会いがなかったら彼女の後半生は、かなり別のものになっていたのではないかと、という思いから日本での活躍を振り返ってみたい。

\*\*\*

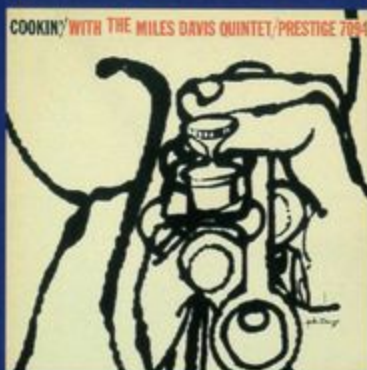
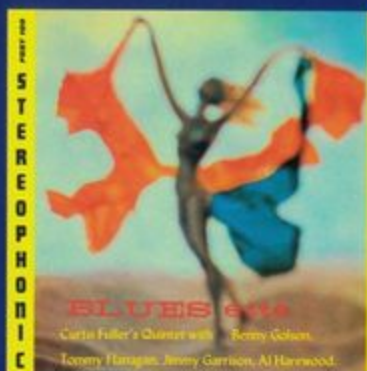
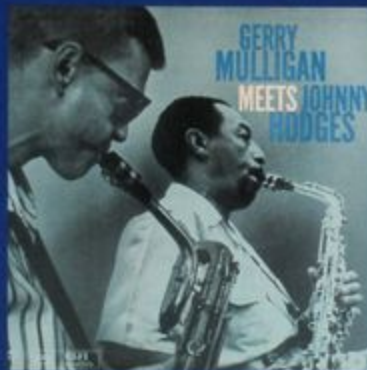
キャロル・スローンは、1977年10月、初来日した。この来日は、偶然決まったという。オールアートの石塚社長は、1974年にサド・ジョーンズ、メル・ルイス・オーケ



ストラを招聘し、この時、バンドのヴォーカリストとして同行した新進のディー・ディー・ブリッジウォーターをすっかり気に入って、彼女の初アルバム『Afro Blue』を制作する。これは、その年のスイングジャーナルのジャズ・ディスク大賞に選ばれ大ヒット。

翌年、彼女をメインにブリッジウォーター・ファミリーで日本ツアーを企画したが、間近でキャンセルになり、オールアートは大損害を被るが、翌年に延期された。ところがこれもキャンセルになってしまう。1977年に石塚社長はディー・ディーに会うべく渡米、彼女がローランド・ハナ、ジョージ・ムラーツのニューヨーク・ジャズ・カルテットと出演していたクラブ「ホッパーズ」へ行くと、そこにはディー・ディー・ブリッジウォーターはおらず、代役としてキャロル・スローンが歌っていた。

特集 テツパン！ 2ホーン・クインテット



当時、キャロル・スローンは40歳で円熟期だったが、ビートルズ旋風でアメリカの軽音楽界が大きく変わり、レコード業界もロック偏重で従来のジャズのレコードは、全く軽視されるようになっていた。キャロルも仕事がないので、ノース・キャロライナに引っ込み、法律関係の事務所のセクレタリーの仕事をしたり、現地のジャズ・クラブ「ザ・フロッグ」のアーティストの仕込みの仕事をして、時々歌ったりしていた。

そんな時ローランド・ハナからディ・ディ・ブリッジウォーターの代わりにニューヨーク・ジャズ・カルテットで歌わないかというオファーを受け、喜んでニューヨークへ戻った。石塚社長が彼女と出会ったのはこの頃だった。彼は、彼女のことはコロムビアのアルバム、『Out Of Blue』や『Live At 30th Street』で知っていたが、彼女を生で聴いてすっかり気に入ってニューヨーク・ジャズ・カルテット[ローランド・ハナ(p)、ジョージ・ムラーツ(b)、リッチー・プラット(ds)、フランク・ウエス(ts,fl)]のヴォーカリストとして招聘を決めた。

そして初来日したキャロル・スローンを、私が初めて見たのは1977年10月24日の芝の

郵便貯金ホールだった。ニューヨーク・ジャズ・カルテットにジョニー・ハートマンとキャロル・スローンの歌が入り、それぞれ5曲を歌ったが、キャロルの歌は先輩のジョニー・ハートマンを完全にくっついて、多くの聴衆が初めて生で聴く彼女の歌の魅力の虜になった夜だった。この時は、10月16日に彼女の好きなエリントン・ナンバーを歌うアルバム『Sophisticated Lady』**1**を来日のトリオをバックに吹き込んでいる。これは1962年以来、彼女にとっては約15年振りの正規録音だった。この来日ではもう一枚、ロプスター・レーベルからダイレクト・カッティングのアルバム『Spring Is Here』**2**を10月23日に録音している。

その録音の後、23日には「U-Kent's」で、作家の阿佐田哲也(色川武大)氏の企画した仲間のプライベート・ライブで小川俊彦(p)、小野寺清(b)、関根英雄(ds)、清水潤(ds)をバックに歌っている。この時、参加者から集めたギャラを払おうとすると、彼女も楽しんだのでギャラは固辞して受け取らず、恵まれない子供に寄付して欲しいと言っていたという。

その後、約5年ほど来日はなかった。この頃、彼女はピアノのジミー・ロウルズと知り合い、ビリー・ホリデイ、カーメン・

マクレエ、サラ・ヴォーンなど伴奏を務めた彼のピアノにすっかり惚れ込み、ジミーも彼女の歌に惚れ込んで恋仲となり一緒に暮らすが、アルコール中毒のジミーとは、つらい思いをして3年程で逃げるように別れている。

1982年8月にアニタ・オデイ、ヘレン・メリルとキャロル・スローンによる「真夏の夜のジャズ・ボーカル」というコンサートが企画される。しかしアニタ・オデイが病気になり、急遽、ロレッツ・アレキサンドリアが来日した。8月24日の郵便貯金ホールなど大きなコンサート以外は、それぞれが別々にツアーしたが、この時は彼女の伴奏は吉田賢一トリオで、大きな会場には高橋達也と東京ユニオン・オーケストラも付いた。

来日中の8月29日にドン・アブニー(p)、成重幸紀(b)、ティム・ホーナー(ds)とアルバム『As Time Goes By』**3**を吹き込んでいる。8月26日に新宿にあったクラブ「カーニバル」でキャロルのライブが行われ、仲間大勢で押しかけ盛り上がった。仲間の山田一雅氏などは、ステージで彼女と踊ったりしていた。キャロルもこの時期は、精神的にもハイな状態だったようでありかなり奔放に振る舞っていた感じだった。素肌の上に薄物の衣装をまとった阿部克自氏のジャケット写真が話題になったりもした。

山田氏を会長に「Carol Sloane Society」が結成されたのもこの時だった。山田氏は翌年、ノース・キャロライナのキャロルを訪ねている。これがかわりに氏は、前後3回彼女の家を訪ねて大の仲良しになった。

彼女は1983年4月にもクリス・コナー、アーネスティン・アンダーソンと「Spring



上:「Carol Sloane Society」会長の山田一雅氏(右手前)らと 下:NHKのスタジオで。筆者(右)の友人達と

Is Here」というコンサートで来日した。ノーマン・シモンズ(p)、ジョージ・ムラーツ(b)、ティム・ホーナー(ds)のトリオに高橋達也と東京ユニオン・オーケストラの伴奏で4月12日に郵便貯金ホールで歌手3人によるコンサートが行われ別の日にそれぞれの別のコンサートも行われている。この3人による『Three Pearls』**4**という東芝EMIのアルバムの録音も4月25日と27日に行われた。キャロルの録音は25日に吉田賢一(p)、成重幸紀(b)、野口勉生(ds)と行われている。

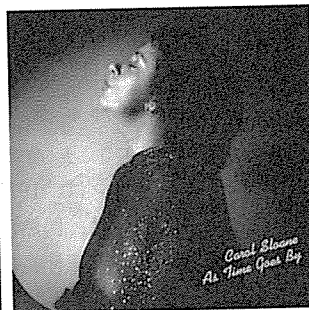
1984年5月には単身来日して約10日間のツアーを行い、東京では「ヤマハホール」やジャズ・クラブ「セラヴィ」、新宿「カー



1



2



3